

愛と死の書

芹沢光治良

新潮文庫

あい しよ
愛 と 死 の 書

新潮文庫

草72=1



昭和二十六年八月二十日 発行
昭和四十五年五月二十日 三十刷改版
昭和五十七年六月二十日 四十七刷

著者 芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

業務部(〇三)二六六一五一

電話 編集部(〇三)二六六一五四四〇

振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⊙ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所
© Kōjirō Serizawa 1951 Printed in Japan

ISBN4-10-107201-9 C0193

新潮文庫

愛と死の書

芹沢光治良著



新潮社版

目次

愛と死の書

第一章	……………	七
第二章	……………	四一
第三章	……………	八六
第四章	……………	一三五

附録

愛と死の書に関するノート(附録その一)	……………	一七四
この秋の記録(附録その二)	……………	一八四
或る女の位置(附録その三)	……………	二〇〇

解説 河上徹太郎

愛
と
死
の
書

第一章

全く夢のような気がします。

漸く二三カ月前のことでした。シベリアを経由して、やっと日本に辿りつき、下関で上りの特急に乗りこんで、食堂車にはいると良人はふと歎息しました。

「ああ、こんな文化を、世界に宣伝する事務局へ、勤めるために帰るなんて、情けない気がするな」

「こんな文化？」

私は聞き咎めましたが、その心がくめずに、良人の視線を追うようにして、周囲を見廻しました。食堂車の中は、上衣を脱いで、胸毛までのぞかせたり、着物の裾を臍の方へ高くはしよったりして、無作法な恰好する者、あちらこちらテーブル越しに話しかける者、実にさかんな光景でした。それに、大変蒸暑い日でもありました。

「形にとらわれてはいけませんわ」

そう、私は微笑を応えました。それまで、ジュネーヴにいて、良人のお勤めの方は存じませんが、私の方は、みがいた鏡の上に坐って、襟を正すような息苦しい朝夕でした。浴衣がけで、夕涼みのできるような気軽さを、すぐに文化というような、おおそれたことに結びつけて、石を積

み重ねたような、重いあちらの外形と比較して、歎息するのは、大袈裟で可笑しい——そんなつもりで、微笑したのですが、

「いいや、形にとらわれてはいないよ、それなら、わが文化なりとして、何を宣伝したらいいのか。またしても、お茶か、お花か、浮世絵、歌舞伎、お能か……しかも、これ等が現代の日本の生活のどこに生きているのだ。この人前で半裸体になれる人々のどこかに、精神的なりと得意にする、例えば、お茶の精神が、感じられるかい……」

こんな風にまくしたてたのも、実は、日本へ帰った安堵や喜悦を、隠しきれなかったからに過ぎないのでしよう。考えれば、日本へ帰りたい日が多かったもの、特に、日本のお好きな良人には。

胸の病気をした折など、私は面倒な人々から遠く離れて、のんきに療養できることを、却って幸福であるとして、喜んでいましたのに、良人は、会いたい人にも会えなからう、日本食でなければ肥れないだろう、ああ、日本の空気を呼吸したらば、胸の病気など、一度になおるだろうにと、こちらがお気の毒に思うくらい、不憫がり、外国に勤めることを、さもご自分の過失のように、詫びるしまつでした。

日本へ帰った最初の夜のことです。お姑様独りで守っていた、良人には馴染深い家のお二階で、真新らしく換えた畳の香を、腹這いになって、かき廻ったような狂気じみた調子も、今考えますと、いくら日本がお好きだからとて、不吉な不安をかもしていたものでした。

「それ、日本へ帰ったぞ、若子、日本に本当に帰ったんだ」

まるで、書生さんのように、私に飛びついて来て、軀をかかえて、ダンスでもなさるように、座敷中をぐるぐる廻るさわぎに、私も嬉しくて、呆れたように笑ってしまいました。が、たびししそうな古いお二階で、さぞ階下のお姑様が仰天なさるでしょうと、そればかり気になって、良人を睨んで、たしなめてみました。

「お母さまがいらっしやることよ、下に」
「つまらないことに、こだわるやつだな」

そう、さもつまらなそうに、畳の上に、大の字型に寝られたが、酒に酔っても、決して身を崩したことはない良人が、白面で、そんな真似をなさる様子が、見るから頬笑ましくて、日本に帰ったことがそれほど喜ばしいのでしょうかと、実際には、私とて劣らず嬉しいのですが、そう疑う気にもなりませんでした。その時、偶然、良人のおなかに動悸が波打つようなのに、初めて気付いて、おやっと目を見張りました。しかし、洋服暮しのこの何年間というもの、夫婦でありながら、良人のおなかを、こんな風に、間近く見る機会がなかったからこそ驚くのだと、軽く解釈して、波打つ動悸から、すぐに健康の衰弱を連想する前に、浴衣がけの功德でしようと、良人のお臍を眺めて、苦笑してしまいました。

「何が可笑しいんだい」
「ごらん遊ばせ、お母さまでしよう、やはり、あの足音は」

階段にみしみし軋る音をさせて、実際にお姑様が上って参りました。

私には厳しい良人ですが、お姑様には可愛い坊やでしようか、好物の奴豆腐の食べ方が足りな

かったし、ご飯も二膳しかかえなかつた、四十前の若い者が（もう四十を越しているのに、お姑様は年齢まで若くごらんになって）そんなで、どこかお悪いのじゃないかえ、随分瘡せなすつたようだが——と、家中、どのお部屋も、風透しのよいようにと、襖を簾戸に換えて、どこにも隠れ場所もないのに、こちらの胸に、戸をたてる余裕のないほど、お姑様は私たちの生活にはいりこもうとなさる。その気疲れで、私は良人が本当に瘡せたのかしらと、心を配るよりも、お姑様のお言葉に刺を感じて、思わず顔をしかめてしまつてしまつてした。

こんな調子では、折角私たちの帰国をお待ち下すつたにしろ、どこか身軽くアパルトマンへでも、移りたいものだ、願うようになりました頃——と申しましたが、帰朝して、二週間にもならなかつたのですが、お勤先では、疲労を勞うおつもりらしく、夏休暇をすぐ取るようにとご親切な申出で、これさいわいと、軽井沢の小さい貸別荘へ逃げることにしました。

たった二人で暮しますことは、結婚して十何年たつても、楽しいことになりません。子供がなくて淋しかりうと、他人様はご挨拶のように、いつも云ってくれますが、子供を持った経験のない者には、子供のある者とは別の世界があるのでしようね、淋しいどころか、良人は幾分私の子供であり、私はまた幾分良人の子供であるような、生活の仕方があります。その上、十年振りに解放せられた日本の生活や自然に、戯者のように何も考えずに、とけこみたいとも願いました。ちょうどその頃、北支に起つた事変が、日本の不拡大方針にも拘わらず、日華事変とじりじり変化して行きましたけれど、高原にしましては、その事変も新聞にしかなく、腕を組んで高原に、東京より一日遅れの新聞記事には、興味も少なくて、平和な異邦人のように、腕を組んで高原

を歩いてばかりいました。云ってみれば、新婚の日のような鮮かな二人の生活でした。

「僕でも召集せられないと、事変だつて気にならないかも知れんな。悪いコスモポリタンになったものだ」

良人は、時々お勤め先のことやお仕事のことを気にかかるらしく、浮かぬ表情をなさっている日もありました。私も、事変や仕事のことではなく、良人の食欲が私よりも少ないことや、意外に疲れ易く、曇りがちなお顔色のことなどに、気をとられて、ふと不安に襲われることがありました。風邪ひとつ引いた験のない健康体ではありますが、不思議なことに、日本に帰ってからは、良人の肉体や健康に注意が向いてしかたなく、これはお姑様の悪い暗示にかかったのかしらと、反省してみますが、とにかく、私の幸福が、それこそ、良人の肉体にかくされているような、熱っぽい感情で、胸一ぱいになるのです。確かに、良人独りを生きる頼りにしてありますが、これでは、あんまり結婚したての女のようにだと、恥ずるのですが、もうどうにもなりません——

「どうしたんだ」

その不安が、良人の胸にも感応するものとみえまして、突然、私の顔を凝視して、そう問われますが、

「あなたの体格で、どうして、徴兵がのがれたのでしょうかと、考えたところ」と、ごまかしました。

「あの頃は軍縮時代だったからさ」

どこかに脆弱なところがおありになったからでしょうかと、不吉なものをさぐるようになりま

した。しかし、他方では、いややそうではない、スイスにいる間、こんな風に、いちいち食慾を計量したり、疲労状態を観察したりするほど、目と鼻とを間近くつけた生き方をしないで、云ってみれば、二人とも、間違つた異国風に、日常生活にも礼服を脱げなかったからこそ、気付かなかつたのでしようが、この食慾、この疲労が、四十二歳の男子の、まあ、常態であるかも知れない、ただ、近頃私の方がむやみと健康になつたので、相対的な感じ方から、愚かしい錯覚に陥ちて、無用な心配をするのでしよう——そう考へては、秘かに不安を払いのけていました。

そんな或る朝、名古屋の実家から弟が応召するという電報を、突然受け取りました。

「そら、軀に火がついたぞ」

そう、良人は冗談を申しましたが、残暑の九十度近い名古屋へ、弟を見送りに参つたからとて、益もなし、残り藪い休暇を良人とたのしみたいと、出掛けるのを多少渋りました。良人は一緒に東京へ出て、帝大病院で健康診断をしてもらうから、その間に、名古屋へ行って、帰途に東京で落合つたあと、熱心に勧めます。それなら、やはり何か自覚症状でもおありでしょうかと、益々弟の応召どころではなく、良人の健康が心配で心配でたまりませんでした。（* 華氏）

「悪いところはないよ。長い間、外国生活した後だから用心だ。それに、日本流では厄年だからね」

そう笑つて誘いますから、そうかしらと、とにかく、ご一緒に東京まで帰ってみましたが、上野駅も東京駅も応召兵の出発で、もうはちきれそうな興奮状態です、それではじめて、応召の意味が分つたような気もして、それに捲きこまれて、良人の勧めるままに、私独り急いで名古屋行

きの急行に乗りました。

東海道筋の戦時気分は、やはり出て来てよかったと、心を緊張させましたが、実家でも、私の結婚当日よりも混雑した賑いで、どのお部屋にも、めいめい違ったグループの酒宴がはられて、広い家に足の踏む場所もない有様でした。ちょうど、駅からの自動車が家の前にとまりました折、輜重兵の一隊が馬と兵車とを連ねて長く続いて、暫らく車から降りることもできませんでした。聞けば、熱田神宮に参詣するそうで、前夜から殆ど絶え間なく続いているとのことでした。残暑がきびしくて、兵隊は帽子の下から日覆をたれ、重い足取りで、馬の手綱をもって、黙々と進んでいるのです。みな小柄で、服装の関係でしようが、少年のように若くて……ああ、戦争だったと、私は胸のせまる思いで、軽井沢での私を愧じたくらいです。そして、家にかげこむなり、奥の座敷にいた両親の前に、べったり坐ってお辞儀をしたぎり、言葉が出ませんでした。父はふだん別荘にばかりおりますが、前夜からずっと本宅におって、目出度いお祝いだといって、迎えてくれましたが、母にはたった一人の男の子、勿論お国のために名譽なことではあります、私は腑甲斐なく、母の顔を見れません。母も落着かなく、あちこちのお部屋を見廻って、私と顔を合わせるのを避けるご様子、涙を出すのを怖れたのでしよう。

弟は頑丈な軀に裸のまま、楽しげにあちこちの酒席を廻って、見るから頼もしく、これなら北支であれ、上海であれ、安心して見送れると思いましたが、しかし、いつの間に堂々たる大人になり、凶太い神経を備えたのでしようと、私は外国で過した十年が、それこそ白紙のよう、嬉

しいやら、悲しいやら、しかも少尉殿とかで、軍服、軍刀、長靴、ピストル、双眼鏡、軍用行李といろいろとりそろえて、花婿のような大がかりな支度でしたが、私には、まだサーベルを持って戯れて、いつも叱りどばしたような弟が、記憶に鮮かなあまり、この物々しさが、嘘のようでもあります。可笑しくもありました。

「姉さん、義兄さんは？」

酒席から抜けでて、廊下の向うで手招くものですから、近づいてみますと、弟は酒臭い息を吐くように、そう囁いて、お離れになった洋間に招じ入れ、さも疲れたように掛けました。

「ママ達には内証ですが、帝大に入院するかも知れないの。病気はなんでもないけど……だから、来れなかったの、ご免なさい。春さんもお酒で疲れてはだめよ」

「義兄さんに遺言して、後を頼みたかったが、姉さん代って聞いてくれる？」

「遺言なんて、若い者の口にするんじゃないが、姉さん代って聞いてくれる？」

「戦争だもの……ママには云えないが、戦死する覚悟だからね」

「戦死の場合なんか考えるものじゃないわ」

「でも、姉さん、出征する者には戦争は死を意味するんですが、姉さんには分ってもらえると思いがね。それは父や母には……みんなお目出度いと祝ってくれてるから、云ってはいかんと思つて、義兄さんが来たら、いろいろ話して頼んでおきたかったんだが——」

陽気そうにしていた弟の真剣に変わった表情に、私はしどろもどろして、
「凱旋するのよ、やな春さん」

そう、肩を叩いて笑おうとしましたが、顔が硬張ってしまい、はしたない手つきで、のめない。眞に火をつけて、深刻な相貌になりそうな場面をつくろったのです。

弟は出征中に父の亡くなった場合、母の亡くなった場合、戦死して父のある場合、戦死して同時に父の亡くなった場合、いろいろの場合を分けて、いちいち家の処置について詳しく述べるのです。それが、また、高原からおりてきた私には、すっかり覚えきれぬか、あやしいほど詳しくて複雑です。日頃、何事によらず楽天家の弟が、召集令を受けてから二三十時間に、それも酒宴につらなりながら、それほど考えたということに、出征しない女には不可知な、戦争の持つ意味が、ほんやりながら感じられるようで、私は肅然として、弟の顔を凝視しました。しかし、それとともに、後のことは後の者に委せて、気安く行ってくれたらと、これも男子に課せられた業かしらと、疑ってもみませんでした。実際、母には私と弟しか子供はなく、弟がけにもはれにも独息子ではあります。外にできた弟や妹を家へ引きとって、養育しておりますから、

「僕には子供はなし、姉さんの方にもなくて、困ったですね」と、最後に歎息する弟が、分別くさくて愚かなことに思われましたが、腹のちがった弟や妹は、やはり、なじまないものかしらと、哀れにもなつて、

「凱旋して、結婚しなすのよ、子供なんか、それからのこと」と、慰めてみました。

「それで、たづ子の方だが、この際に綺麗にして、安心して征きたいが——」

「あら、まだかたがついていなかったの」

「親爺に一万円出すように、姉さんから話してくれないかなア」